

報告

大学生の学修意欲と農業高校生の学習意欲の研究

——A 大学の K 農業高等学校との高大連携プログラム「K 農業高校 & A 大学プログラム」の事例——

楠奥繁則^{1*} 藤原なつみ^{2*} 吉川直樹^{3*} 海崎彩^{1*} 松原豊彦^{4*}

1* 立命館グローバル・イノベーション研究機構専門研究員

2* 立命館グローバル・イノベーション研究機構研究員

3* 立命館大学工学部特任助教

4* 立命館大学経済学部教授

要約：本稿は、高大連携プログラム「K 農業高校&A 大学プログラム」の概要と、プログラムが大学生と高校生の学修（学習）意欲に及ぼす効果について報告する。本プログラムでは、まず、高校生が課題解決型学習の研究成果を報告し、大学生と大学教員がコメントした。次に、高校生向けに大学教員の講義と大学生の講義を実施し、最後に交流会を設けた。大学生・高校生に対する質問紙調査の結果、次の3つのことが示唆された。本プログラムは①高校生の学習意欲を高める効果がある、②大学生の学修意欲を高める効果がある、③もともと学修意欲の高い大学生には学修意欲を高める効果がない。

（キーワード：高校生の学習意欲、大学生の学修意欲、高大連携プログラム）

A Study on High School and Undergraduate Students' Learning Motivation —— A Case of Joint Management of the Educational Relationship between K Agricultural High School and A University for the "K Agricultural High School & A University Program" ——

Shigenori KUSUOKU^{1*} Natsumi FUJIWARA^{2*} Naoki YOSHIKAWA^{3*}

Aya KAIZAKI^{1*} Toyohiko MATSUBARA^{4*}

1* Senior Researcher of Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University

2* Researcher of Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University

3* Assistant Professor, College of Science and Engineering, Ritsumeikan University

4* Professor, College of Economics, Ritsumeikan University

Abstract: This paper introduces the joint management of an educational relationship between K Agricultural High School and A University, and reports the program's effects to increase students' motivation for learning at both schools. In the program, first, the high school students presented the results of their project based learning, and the university students and university instructor gave comments. Next, the high school students received a lecture from the university instructor and a research report from the university student. Finally, the high school students, university students, and instructors attended a social gathering. An analysis of responses to the study questionnaire suggests that students' motivation for learning increased at both schools, except the university

students who have high motivation originally.

(Key words: high school students' learning motivation, undergraduates' learning motivation, joint management of the educational relationship between high schools and universities)

1. はじめに

近年、高校生の学習意欲と大学生の学修意欲の低さが問題視されている。邵(2009)¹⁾の調査では、「勉強しようという気持ちがわからない」と回答した高校生の割合は63.2%(小学生37.7%,中学生58.0%)となっている(「とてもそう」+「まあそう」の%)。「どうしてこんなことを勉強しなければならないのかと思う」については高校生54.1%(小学生29.8%,中学生52.8%)となっている(「とてもそう」+「まあそう」の%)。

大学生についても、大学での学修に対する内発的モチベーションが高まらない学生が年々増加している(楠奥・中野, 2015)²⁾。溝上(2004)³⁾の研究では、学修意欲、特に授業・講義以外での取り組みに対するモチベーション(学業意欲)は入学期から高くないことが、また、授業・講義での取り組みに対するモチベーション(授業意欲)は1回生後期、2回生と段階を経て低下する傾向のあることが報告されている。

ところで、A大学の研究プログラムの1つである「農水産業の6次産業化による新食料研究拠点」(以下、A大学新食料拠点)では、農水産業の「6次産業化」(これまで別々に展開していた第1次・2次・3次産業が連携することによって、農水産物に付加価値をつけ、地域に新しいビジネスを作り出すことを意味する)をキーワードに、持続可能で質の高い食料生産システムを創出し、日本の食料生産の質的、量的な建て直しに貢献することを目指している。そのために、農水産物の生産・加工から流通・消費までを一元化し、かつ食教育や食文化などを含めた総合的な食農連携モデルを創出しようとしている。その一環として、6次産業化を担う人材育成や食に関わるリテラシーの醸成のために、地元の農業高校などの高校生や高校教職員も巻き込み、大学生と大学教職員とともに、第1次産業の未来について考えるプログラムの開発を計画している。プログラム開発を行ううえで

は、まず、農業高校生の学習意欲と、大学生の学修意欲が高まるようなプログラムの開発を実践し、知見を蓄積していく必要がある。そこで、学習(修)意欲の向上を目的としたプログラムを検討し、2015年7月4日に、A大学新食料拠点と同じ市内にあるK農業高校との連携プログラム「K農業高校&A大学プログラム」を実施した。本報告では、「K農業高校&A大学プログラム」が農業高校生の学習意欲と大学生の学修意欲に及ぼす効果について報告する。

2. 方法

農業高校生の学習意欲と大学生の学修意欲を高めるために、「K農業高校&A大学プログラム」を考え、2015年7月4日に実施した。

(1) 「K農業高校&A大学プログラム」の概要

「K農業高校&A大学プログラム」には、高校3年生の生徒20名、大学生7名(3回生=4名, 4回生=2名, 5回生=1名)、大学教員3名が参加した。

「K農業高校&A大学プログラム」では、①高校生の研究報告会(3グループが報告)、②大学教員による講義、③大学生による講義、④交流会、の4つのプログラムが実施された(表1)。

表1 「K農業高校&A大学プログラム」の概要

13時30分	集合
13時50分～	グループ1の研究報告 グループ2の研究報告 グループ3の研究報告
14時50分～	休憩
15時～	大学教員による講義
15時40分～	大学生による講義
16時～	交流会
16時30分	解散

K農業高校では課題解決学習を実施しており、

毎年、生徒の代表（複数のグループ）が滋賀県学校農業クラブ連盟の年次大会に出場し、課題解決学習の成果を報告している。年次大会の優秀グループは近畿大会に出場できる。2015 年度も、K 農業高校からは 3 グループが出場することになった。そこで、高校生の研究報告会（60 分）では、その 3 グループに年次大会で報告する課題解決学習の成果を報告してもらった（報告時間 10 分×3 グループ）。その後、大学生と大学教員がその報告に対するコメントを行った。

コメントを行う大学生には、報告者が年次大会での報告に対する自信を高めてもらうために、報告者の良かった点をなるべく褒め、高校生の能力を説得するよう指示した。これは Bandura (1977)⁴⁾ のセルフ・エフィカシー理論で議論される「言語的説得」に基づいている。セルフ・エフィカシーとは、不馴れな行動に対する自信の程度を表す概念で、セルフ・エフィカシーの向上はモチベーションの向上に直接つながる。セルフ・エフィカシーを高める方法の 1 つである言語的説得は、他者の言葉による説得や自己教示などがセルフ・エフィカシーを高めるといものである。

大学教員による講義（40 分）では、いつ頃から子どもは勉強嫌いになるのか、なぜ、子どもは勉強嫌いになるのか、その考えられる理由について紹介した。つまり、高校生に、勉強嫌いになる原因の多くが主に個々人の能力にあるのではなく、わが国の教育方法などの外的要因にあることを説得した（原因帰属理論）^注。それ以外に、大学での学びに対する興味をもってもらうために、大学ではどのようなことを学ぶのかについての話もした。

大学生の講義（20 分）では、1 人の学生に大学で学んでいること（社会心理学からみた恋愛）を高校生に話してもらった。具体的には、社会心理学で議論されている対人魅力の規定要因や、初頭効果（初対面の人に出会った場合、私たちは最初に呈示された情報によって、その人の印象を形成、判断してしまう傾向があるということ）などが紹介された。恋愛に関する内容なら、多くの高校生が興味をもつと考えたからである。

交流会（30 分）では、お菓子やジュースを用意し、それらを飲食しながら「K 農業高校&A 大学プログラム」の感想を中心に、自由に会話をしてもらった。方法は、参加した高校生を 5 つのグループに分け、各グループに大学生と大学教員を配置した（交流会に参加した大学教員は 2 名であったため、3 つのグループには大学教員は配置していない）。

（2）質問紙調査

「K 農業高校&A 大学プログラム」が農業高校生の学習意欲などに影響を及ぼしたのかについて確かめるために、このプログラムの終了後（交流会後）に、高校生と大学生の参加者を対象とした質問紙調査をそれぞれ実施した。

高校生の参加者を対象とした質問紙調査では、高校生の学習意欲の変化、大学進学意欲の変化、A 大学の授業興味への影響、人前で話す自信（セルフ・エフィカシー）への影響、「K 農業高校&A 大学プログラム」の推奨度について尋ねた（質問紙は巻末に付録として添付）。

大学生の参加者を対象とした質問紙調査では、大学生の学修意欲の変化について尋ねた（質問紙は巻末に付録として添付）。

3. 結果

表 2（左表）は高校生の「K 農業高校&A 大学プログラム」の推奨度である。回答者全員（ $n=18$ ）が、友人や後輩に勧めたいと回答している。このことから、多くの生徒がこのプログラムに満足したと考えられる。大学生による講義と、交流会の推奨度が高いことから（表 2 右表）、特にこの 2 つの満足度が高かったと考えられる。

表 3（左表）は【Q1】（高校生の学習意欲変化）の結果である。「K 農業高校&A 大学プログラム」の参加者（ $n=20$ ）の 8 割が、学習意欲が変化したと回答した。

サンプルサイズは小さいが参考程度に、【Q1】で「はい」に○をつけた場合を 1 点、「いいえ」に○をつけた場合を 0 点と得点を与え、これを従属変数にした。次に、【Q2】の 4 つの項目（K 農業

高校生の研究報告会, 大学生による講義, 大学教員による講義, 交流会) に, ○がつけられた項目に 1 点を, ○がつけられなかった項目に 0 点と得点を与えた (ただし, 【Q1】で「いいえ」と回答した者は, 【Q2】は回答していない。この場合, 【Q2】の全項目に 0 点を与えた)。そして, この 4 つを独立変数とした重回帰分析を行った (表 4)。結果, 全てのプログラムが高校生の学習意欲に変化を与えたと考えられる ($\beta = 0.48 \sim 0.80 ; p < 0.5, p < 0.01$)。

表 5 (左表) は 【Q3】 (高校生の大学進学意欲の変化) の結果である。参加者 ($n = 20$) の約 3 割が, 大学進学意欲が高まったと回答した。

表 4 と同様に, 【Q3】で「はい」に○をつけた場合を 1 点, 「いいえ」に○をつけた場合を 0 点と得点を与え, これを従属変数にした。次に, 【Q4】の 4 つの項目に, ○がつけられた項目に 1 点を, ○がつけられなかった項目に 0 点と得点を与えた (【Q3】で「いいえ」と回答した者は, 【Q4】は回答していない。この場合, 【Q4】の全項目に 0 点を与えた)。そして, この 4 つを独立変数とした重回帰分析を行った (表 6)。結果, 交流会が高校生の大学進学意欲や学習意欲に変化を与えたと考えられる ($\beta = 0.55 ; p < 0.01$)。

表 7 (左表) は 【Q5】 (高校生の A 大学の授業興味への影響) の結果である。回答者 ($n = 19$) の約 6 割が, A 大学の授業に興味をもったと回答した。

表 4 と表 6 と同様に, 【Q5】で「はい」に○をつけた場合を 1 点, 「いいえ」に○をつけた場合を

0 点と得点を与え, これを従属変数にした。次に, 【Q6】の 4 つの項目に, ○がつけられた項目に 1 点を, ○がつけられなかった項目に 0 点と得点を与えた (【Q5】で「いいえ」と回答した者は, 【Q6】は回答していない。この場合, 【Q5】の全項目に 0 点を与えた)。そして, この 4 つを独立変数とした重回帰分析を行った (表 8)。結果, 大学教員による講義と大学生による講義の 2 つが, 高校生に A 大学の授業に興味をもたせたと考えられる ($\beta = 0.66, 0.67 ; p < 0.01, p < 0.001$)。

表 9 (左表) は 【Q7】 (高校生の人前で話す自信への影響) の結果である。参加者 ($n = 20$) の約 5 割が, 人前で話す自信が高まったと回答した。

表 4, 表 6, 表 8 と同様に, 【Q7】で「はい」に○をつけた場合を 1 点, 「いいえ」に○をつけた場合を 0 点と得点を与え, これを従属変数にした。次に, 【Q8】の 4 つの項目に, ○がつけられた項目に 1 点を, ○がつけられなかった項目に 0 点と得点を与えた (【Q7】で「いいえ」と回答した者は, 【Q8】は回答していない。この場合, 【Q8】の全項目に 0 点を与えた)。そして, この 4 つを独立変数とした重回帰分析を行った (表 10)。結果, 高校生の研究報告会と交流会の 2 つが, 高校生の人前で話す自信を高めたと考えられる ($\beta = 0.53, 0.71 ; p < 0.01, p < 0.001$)。

大学生 ($n = 6$) においては, 4 名は学修意欲が「高まった」と, 2 名は「高まらなかった」と回答した。表 11 は, 学修意欲が高まった理由である (自由記述)。

表 2 高校生の「K 農業高校 & A 大学プログラム」の推奨度 ($n = 18 ; 【Q9】$ と 【Q10】)

はい	100.0%	高校生の研究報告会	22.2%
いいえ	0.0%	大学教員による講義	38.9%
		大学生による講義	50.0%
		交流会	50.0%

右表は複数回答 (2 つまで)

表 3 高校生の学習意欲の変化 ($n = 20$; 【Q1】 と 【Q2】)

はい	80.0%	高校生の研究報告会	20.0%
いいえ	20.0%	大学教員による講義	35.0%
		大学生による講義	20.0%
		交流会	30.0%

右表は複数回答 (4 つまで)

表 4 高校生の学習意欲に影響を及ぼした要因 ($n = 20$)

決定係数	独立変数	標準 偏回帰係数	t 値	VIF
$R^2 = 0.55$ (0.43)	高校生の研究報告会	0.80	3.47 **	1.75
	大学教員による講義	0.76	3.53 **	1.56
	大学生による講義	0.48	2.54 *	1.21
	交流会	0.70	3.32 **	1.47

注1) ** $p < 0.01$, * $p < 0.5$

注2) ()内の数値は修正済み R^2 .

注3) VIF=1.21~1.75で多重共線性は認められない。

表 5 高校生の大学進学意欲の変化 ($n = 20$; 【Q3】 と 【Q4】)

はい	25.0%	高校生の研究報告会	0.0%
いいえ	75.0%	大学教員による講義	10.0%
		大学生による講義	10.0%
		交流会	15.0%

右表は複数回答 (4 つまで)

表 6 高校生の大学進学意欲に影響を及ぼした要因 ($n = 20$)

決定係数	独立変数	標準 偏回帰係数	t 値	VIF
$R^2 = 0.72$ (0.66)	大学教員による講義	0.28	1.82 †	1.31
	大学生による講義	0.28	1.82 †	1.31
	交流会	0.55	3.80 **	1.17

注1) ** $p < 0.01$, † $p < 1.0$

注2) ()内の数値は修正済み R^2 .

注3) VIF=1.17~1.31で多重共線性は認められない。

表 7 高校生の A 大学の授業興味への変化 ($n = 19$; 【Q5】 と 【Q6】)

はい	63.2%	高校生の研究報告会	0.0%
いいえ	36.8%	大学教員による講義	47.4%
		大学生による講義	42.1%
		交流会	26.3%

右表は複数回答 (4 つまで)

表 8 高校生の A 大学の授業興味への変化 (n = 19)

決定係数	独立変数	標準 偏回帰係数	t 値	VIF
$R^2 = 0.79$ (0.75)	大学教員による講義	0.66	5.10 ***	1.18
	大学生による講義	0.67	4.04 **	1.97
	交流会	0.27	1.55	2.17

注1) *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$

注2) ()内の数値は修正済み R^2 .

注3) VIF=1.18~2.17で多重共線性は認められない。

表 9 高校生の人前で話すことに対する自信の変化 (n = 20 ; 【Q7】と【Q8】)

はい	50.0%	高校生の研究報告会	10.0%
いいえ	50.0%	大学教員による講義	10.0%
		大学生による講義	10.0%
		交流会	30.0%

表 10 高校生の人前で話すことに対する自信に影響を及ぼした要因 (n = 20)

決定係数	独立変数	標準 偏回帰係数	t 値	VIF
$R^2 = 0.78$ (0.72)	高校生の研究報告会	0.53	4.26 **	1.06
	大学教員による講義	0.20	1.46	1.26
	大学生による講義	0.20	1.46	1.26
	交流会	0.71	5.65 ***	1.07

注1) *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$

注2) ()内の数値は修正済み R^2 .

注3) VIF=1.06~1.26で多重共線性は認められない。

表 11 大学生の学修意欲が変化した理由 (自由記述)

学生 A さん「高校生に負けていられない。高校生と同等程度では恥ずかしいと思ったから」

学生 B さん「高校生の発表が想像以上に上手で、自分も負けていられないと感じたからです。専門外の農業に関する発表を聞いて、純粋におもしろいと思った」

学生 C さん「自分たち大学生より高いレベルで発表されていて、今まで見てきた現状に満足せずがんばっていかうと思ったから」

学生 D さん「高校生の発表を見て、私も頑張らないと…と思いました！頑張らんとあかんというマイナス的なやる気ではなく、負けてられへん！！頑張りたい！というプラス的なやる気です」

4. 考察

参加者 20 名が全員回答したわけではないが、高校生の「K 農業高校&A 大学プログラム」推奨度は非常に高かったことから(表 2 左表)、参加した高校生にとって「K 農業高校&A 大学プログラム」は満足度の高いプログラムだったと考えられる。

表 3 (左表) より、「K 農業高校&A 大学プログ

ラム」に参加した高校生の 8 割が、学習意欲が高まったと回答している。表 3 (右表) と表 4 より、全てのプログラム(高校生の研究報告会、大学教員による講義、大学生による講義、交流会)が高校生の学習意欲を高めたと考えられる。

高校生の学習意欲が高まった理由について、次のように推測する。前述した Bandura (1977) ⁴⁾

のセルフ・エフィカシー理論に基づくと、第 1 に、高校生の研究報告会で、高校生たちが学習してきた成果を報告し、大学生と大学教員によって、それが高く評価されたことが影響したと考えられる（遂行行動の達成と言語的説得）。遂行行動の達成とは、やればできるだろうと思うことのできる直接の成功体験がセルフ・エフィカシーを高めるといえるものである。

第 2 に、恋愛を科学する方法を学修してきた大学生の話（大学生の講義）は満足度が高かったことから（表 3 右表）、高校生にとって大学生の講義は非常に興味深かったものだと考えられる。つまり、大学生の話を通じて、高校生の気分が高揚し、学習意欲が高まったのであろう（情動的喚起）。情動的喚起とは、気分の高揚がセルフ・エフィカシーを高めるといえるものである。

第 3 に、交流会で大学生や大学教員から学習についての多くのアドバイスをもらい、励まされたことによって気分が高揚し、モチベーションが高まったことも考えられる（情動的喚起）。

第 4 に、自分が勉強嫌いになった理由を、「自分の責任だ」と自己責任論的に考えていた者が、大学教員による講義によって、育った環境が強く影響していることを理解でき（原因帰属理論^注）、その結果、「私もやればできそうだ」と思えるようになったことも考えられる。

表 5（左表）から、「K 農業高校&A 大学プログラム」を通じて、参加した高校生の約 8 割が大学進学意欲に影響しなかった回答している。その理由はプログラムに参加した高校生は全員が 3 年生で、また、全員が既に進路が決定していたためだと考えられる。だが、表 7（左表； $n=19$ ）より、生徒の A 大学の授業興味にはポジティブな影響を及ぼしている。このことを踏まえると、高校生の進路が決定していない時期に「K 農業高校&A 大学プログラム」を実施していれば、高校生の大学進学意欲に影響を与えられたかもしれない。

A 大学の授業興味にポジティブな影響を及ぼした理由は、大学教員による講義で、高校生が大学ではどのようなことを学修するのかについて、具体的に知ることができたことだと考える。また、

大学生による講義で、高校生は実際に大学生が大学でどのようなことを学修しているのかを知ることができたことも考えられる。その結果、「自分でも学修できそうだ」と思えるようになったのであろう（言語的説得）。交流会がその興味にポジティブな影響を及ぼさなかった理由は、大学生や教員が高校生に、A 大学の授業の魅力について語れなかったことや、A 大学の授業の良さについて説得できなかったことが考えられる。

表 9（左表）より、高校生の参加者 5 割が「K 農業高校&A 大学プログラム」を通じて、人前で話すことに対する自信が高まったと回答した。特に、高校生の研究報告会と交流会は、人前で話す自信（セルフ・エフィカシー）を高めるプログラムであると考えられる。高校生の研究報告会で、実際に人前で話すという成功体験を獲得できたことが、その自信を高めたと考えられる（遂行行動の達成）。また、交流会を通じて、普段話すことのない大学生や大学教員と話すことで、その自信が高まったことも考えられる（遂行行動の達成）。大学生や大学教員によって、人前で話すためのアドバイスをもらった高校生もいたため、それが影響したことも考えられる（言語的説得）。大学教員による講義や大学生による講義が、高校生の人前で話すことに対する自信に影響を及ぼさなかった理由は、それらの講義ではコミュニケーションや社会的スキルを高める方法については全く触れなかったからだと考える。

一方、高校生の参加者 5 割が人前で話す自信は高まらなかったと回答した。高校生の研究報告会では、グループ報告であったため、全員が報告を行ったわけではなかった。全員が報告できる機会を提供していれば、もっと多くの高校生がその自信を高めたかもしれない。

質問紙調査に参加した大学生 6 名のうち、4 名は「K 農業高校&A 大学プログラム」を通じて、学修意欲が「高まった」と回答した（2 名は「高まらなかった」と回答）ことから、「K 農業高校&A 大学プログラム」は大学生の学修意欲を高める効果があることが示唆された。その 4 名のうち 3 名が「負けていけない」、1 名が「大学生より高

いレベル」と述べていることから (表 11), 大学生は自分より同等, あるいは, それ以下の能力だと思いついていた高校生 (モデル) が, 自分たちよりもレベルの高い報告をしたことから, 「優れた研究報告を高校生にもできたのだから, 大学生である自分にできないはずはない」と感じ (代理的経験と情動的喚起), また, そのことを自分自身に言い聞かせ (言語的説得), 学修意欲が高まったと考えられる。代理的経験とは, 他者の行動を観察し, 自分でもできそうだと感じることであればセルフ・エフィカシーが高まるというものである。

前述したように, 授業意欲は 1 回生後期, 2 回生と段階を経て低下する傾向があるので (溝上, 2004), その時期に「K 農業高校&A 大学プログラム」のような高大連携プログラムを実施することができれば, その問題を克服できるかもしれない。また, 入学時期から高くない学業意欲を高めることもできるかもしれない。

「高まらなかった」と回答した 2 名については, プログラム後に, 1 人 5 分程度のインタビュー調査を行った。1 名 (3 回生) は大学院進学のために 1 回生の頃から日々熱心に学修しているタイプで, 残りの 1 名 (3 回生) についても, 興味のある学問分野があり, その分野の学問を熱心に学修しているタイプであった。つまり, 両者の共通点は, 学修意欲が非常に高いということであった。このことから, 学修意欲の高い学生には, 「K 農業高校&A 大学プログラム」によって学修意欲を高めることはできないことが示唆された。

本研究で示唆されたことは, 次の 4 点である。

- ① 「K 農業高校&A 大学プログラム」は高校生の学習意欲を高める効果がある。
- ② 「K 農業高校&A 大学プログラム」は大学生の学修意欲を高める効果がある。
- ③ 「K 農業高校&A 大学プログラム」はもともと学修意欲の高い大学生には, 学修意欲を高める効果がない。
- ④ 「K 農業高校&A 大学プログラム」は高校生の人前で報告することに対する自信 (セルフ・エフィカシー) を高める効果がある。

以下の 3 点を今後の課題とする。まず, 高校生

の進路が決定していない時期に「K 農業高校&A 大学プログラム」を実施し, 高校生の大学進学意欲の変化を確認すること。次に, 大学生の 1 回生後期頃に「K 農業高校&A 大学プログラム」を実施し, 大学生の授業意欲の変化を確認すること。そして, 学修意欲の高い大学生の学修意欲を高められる高大連携プログラムを開発すること。

注) これはモチベーション理論の 1 つ, 原因帰属理論に基づいている。我々はクラブの試合や大会で良い成績が残せなかったり, 職場の仕事がうまくいかなかったとき, 「なぜそのような結果になってしまったのか」, 「自身の練習不足か」, 「それとも自分の能力が低かったのか」, などとその原因を考えたりする。成功した場合でも, その原因について考えたりする。このように, 原因帰属理論では, 成功や失敗をどのような原因に帰属させるかによって, 今後の行動に影響を及ぼすと考える。

引用文献

- 1) 邵勤風：学習に関する意識と実態, 第 2 回子ども生活実態基本調査報告書, 2009 年.ベネッセ教育総合研究所ホームページ<<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=3333>> (2015 年 12 月 31 日)
- 2) 楠奥繁則・中野謙：セルフ・エフィカシー理論からみた大学生の学業意欲の研究—A 大学の「六次産業化の担い手プログラム」での事例—, 大学教育研究ジャーナル, 第 12 号, 8-20, 2015 年.
- 3) 溝上慎一：大学新入生の学業生活への参入過程—学業意欲と授業意欲—, 京都大学高等教育研究, 第 10 号, 67-87, 2004 年.
- 4) Bandura, A. “Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change”, *Psychological Review*, 84, 191-215, 1977.

付録

※高校生に配布した質問紙

【Q1】

「K 農業高校&A 大学プログラム」に参加したことで、あなたは今後、高校での勉強を頑張ってみようと思えるようになりましたか？

1.はい 2.いいえ

【Q2】

【Q1】で「1.はい」に○をつけた方にお伺いします。次の1～4のうち、どのプログラムが「高校での勉強を頑張ってみよう」と思うようにさせてくれましたか？当てはまる番号、全てに○をつけて下さい。

1.K 農業高校生の研究報告会 2.大学生による講義
3.大学教員による講義 4.交流会

【Q3】

「K 農業高校&A 大学プログラム」に参加したことで、あなたは卒業後、大学に進学して学問を学んでみたいと思うようになりましたか？

1.はい 2.いいえ

【Q4】

【Q3】で「1.はい」に○をつけた方にお伺いします。次の1～4のうち、どのプログラムが「卒業後、大学に進学して学問を学んでみたい」と思うようにさせてくれましたか？当てはまる番号、全てに○をつけて下さい。

1.K 農業高校生の研究報告会 2.大学生による講義
3.大学教員による講義 4.交流会

【Q5】

「K 農業高校&A 大学プログラム」に参加したことで、あなたは一度、A大学の授業を受けてみたいと思うようになりましたか？

1.はい 2.いいえ

【Q6】

【Q5】で「1.はい」に○をつけた方にお伺いします。次の1～4のうち、どのプログラムが「一度、A大学の授業を受けてみたい」と思うようにさせてくれましたか？当てはまる番号、全てに○をつけて下さい。

1.K 農業高校生の研究報告会 2.大学生による講義
3.大学教員による講義 4.交流会

【Q7】

「K 農業高校&A 大学プログラム」に参加したことで、あなたは人前で話す自信が高まりましたか？

- 1.はい 2.いいえ

【Q8】

【Q7】で「1.はい」に○をつけた方にお伺いします。次の 1.~4.のうち、どのプログラムが「人前で話す自信」を高めてくれましたか？当てはまる番号、全てに○をつけて下さい。

- 1.K 農業高校生の研究報告会 2.大学生による講義
3.大学教員による講義 4.交流会

【Q9】

あなたの友人や後輩にも「K 農業高校&A 大学プログラム」をすすめたと思いますか？

- 1.はい 2.いいえ

【Q10】

【Q9】で「1.はい」に○をつけた方にお伺いします。次の 1.~4.のうち、どのプログラムをあなたの友人や後輩にすすめたと思いますか？当てはまる番号、2つまで○をつけて下さい。

- 1.K 農業高校生の研究報告会 2.大学生による講義
3.大学教員による講義 4.交流会

アンケートにご協力頂き、誠にありがとうございました。

※大学生に配布した質問紙

【Q1】

あなたは「K 農業高等学校&A 大学プログラム」に参加して、大学での学修意欲は高まりましたか？当てはまる番号に○をつけてください。

1.高まった 2.高まらなかった

【Q2】

【Q1】 で「1.高まった」に○をつけた方にお尋ねします。「大学での学修意欲が高まった」理由を、詳しくお教えてください（自由記述）。

アンケートにご協力頂き、誠にありがとうございました。